

Hans-Jörg Ronsdorf

十字架は
私たちとどう関わるのか

シンプル。
明快。



イエスは
なぜ死な
なければ
ならなかつた
のか

イエスはなぜ死ななければなら なかったのか

十字架は私たちと何の関係があるのか

Hans-Jörg Ronsdorf

第1版 2026年10月、Sulzberg

無断転載を禁じます

表紙デザイン：クリスティーネ・ロンズドルフ（Christine Ronsdorf）

聖書の言葉は自由な訳で引用しています

ご注文・ご質問・お問い合わせ：hj-ronsdorf@t-online.de

しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが**私たちのために** 死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。

ローマ人への手紙5章8節

この小さな本は、ただ一つの問いを追いかけます。二千年前の一人の男の死が、なぜ今日の私の助けになるのでしょうか。この本は、教会とあまり縁のない読者のために書きました。一歩ずつ、やさしい言葉で進みます。

目次

1 簡単な問い	6
2 私たちの何がおかしいのか	8
3 神は本当はどんな方か	11
4 なぜ血なのか	14
5 イエスご自身が語ったこと	17
6 三つの難しい言葉	20
7 イエスの死はどのように私たちを救うのか	24
8 なぜイースターが欠かせないのか	29
9 良い知らせ	32

1 簡単な問い

二千年前、一人の男が処刑されました。町の外、城壁の前でのことです。木の柱、木の十字架にかけられました。暴力を見慣れた、物見高い見物人たちの前で。当時は多くの人がそのように死にました。ローマ人は何千人もの人を殺しました。多くの人を十字架につけました。無意味な死です。

この一人の男について、キリスト者は今日に至るまで不思議なことを言います。彼は私たちのために死んだ、と言うのです。「私たちのために」とは、どういう意味でしょうか。この一つの死の、何がほかと違うのでしょうか。

ほかの人のために死ぬ人は、昔もいましたし、今もいます。そうするほかに、ほかの人を死から救う方法がないときです。自分自身をほかの人のために差し出すこと。これ以上に大きなことはできません。ほかの人が生きられるようにするためです。

昔、まだ予防接種がなかったころ、子どもたちはジフテリアで窒息して死にました。ねばねばした膜がのどに広がり、ふさいでしまうのです。ときには、ただ一つの方法しかありませんでした。医師が細い管を差し込み、自分の口でその膜を吸い出すのです。子どもはまた息ができるようになりました。けれども医師は、今度は自分の中にその病気を抱えることになりました。それがもとで死んだ医師もいます。

その医師は、ただ助けただけではありません。子どもを殺そうとしていたものを、自分の中に取り込んだのです。病気は子どもから出て行き、医師の中に入りました。

まさにここから問いが始まります。イエスが私たちのために死んだのなら、いったい何から私たちを救ったのでしょうか。このたとえを当てはめるなら、病気とは何だったのでしょうか。そして、それはどこにあったのでしょうか。

ほとんどの人は、病気などまったく感じていません。生活し、働き、愛し、最善を尽くしています。病気ですって？ どこに？ そして、仮に病気があるとしても、二千年前の一人の男の死が、なぜそれを癒やすというのでしょうか。一人の男がエルサレムで死にました。私はここで生きています。

彼の十字架は、私と何の関係があるのでしょうか。これは素朴すぎる問いではありません。キリスト教に向けることのできる、最も大切な問いです。この小さな本で私がしたいのは、ただ一つ。この一つの問いに答えようとすることです。一步一步進みます。まず、私たちは何に苦しんでいるのか。次に、それを私たちから取り去るのはだれなのか。次に、その方に何が起こるのか。そして最後に、それはどのようにして私に届くのか。

最初のキリスト者の一人が、この言葉をもっと詳しく言い表しました。イエスは私たちの罪を、ご自分のからだに負われた。あの木の上で、十字架の上で。そして、その傷によって私たちは癒やされた、と書いたのです。¹

この言葉の中から、三つの言葉を覚えておいてください。

負う。からだ。癒やし。

このことを、これから少し考えていきます。

1. ペテロの手紙第一2章24節

2 私たちの何がおかしいのか

私は神から始めません。

話は私たちのことです。

私たちのだれも、だれから生まれるか、どこに生まれるかを選べませんでした。人生がどんな境遇に私たちを放り込むかは、私たちが決めたことではありません。今どこに立っているかも、たいていは私たちが決めたものではありません。

ここでの話は、もう第1章の子どものような、からだの病気のことではありません。手でつかめない病気と、それがどのように感じられるかの話です。むなしさ、無意味さ、罪責感、心が碎けていること、出口がないこと、縛られていること、希望がないこと。だれもこんなものを感じたくはありません。けれども、正直に立ち止まる人は、こうした感覚や、それに似た感覚に気づくかもしれません。

それはしばしば、静かなひとときにやって来ます。眠れない夜に。お墓の前で。あるいは、だれかがもうあなたと口をきいてくれなくなったときに。そのとき、押しのけることのできない何かがそこにあります。

だれにでも、もう取り返しのつかないことがあります。口から出てしまった言葉。バタンと閉められたドア。仲直りする前に亡くなってしまった人。だれも気づかなかったけれど、自分では決して忘れられないごまかし。

あなたにできることはたくさんあります。それを認めることができます。謝ることができます。できるところでは損害を償うことができます。もう二度としないと決心することができます。

けれども、気づいたときには遅すぎます。謝罪は、もう相手に届きません。損害は償えません。それに見合うお金がないからです。あるいは、そもそも償うことが不可能だからです。そして決心は、次のときまでしか続きません。

たとえすべてがうまくいったとしても、何かが残ります。その出来事は起こってしまいました。それは世界の中に残っています。どんな償いも、それを起こらなかったことにはできません。

ここまで、私たちは人間だけを見てきました。でも、もし神が私たちの創造主だとしたら、どうでしょうか。世界を造ったのは私たちではありません。自然の法則も私たちが造ったものではありません。罪とどう向き合えるのか、どうすれば本当に罪から自由になれるのか。その法則や条件を決めたのも、私たちではありません。私たちが生まれてきたのは、神の世界です。私たちがそう思い込んでいても、ルールを決めるのは私たちではないのです。

上に挙げたことはすべて、命にかかわる病気にたとえることができます。聖書には、それを表す短い言葉があります。「罪」です。

「罪」という言葉は使い古されています。多くの人は、そこにお説教や、立てた人差し指しか聞き取りません。けれども、意味されているのはとても身近なことです。聖書が使っている言葉は、文字どおりには「的を外す」という意味です。的をそれた矢のようにです。

ですから、罪とはこういうことです。私は、本来あるべき私ではない。そして、あってはならないことをしてしまった。この二つは一つに結びついています。罪は行いを指します。行いは数えることができます。そして罪は、そうした行いが出てくる、私たちの本性の一部をも指します。それは数えることができません。けれども、だれもがそれを知っています。何かをしようと決めたのに、そのあと別のことをしてしまう。まるで、私たちを駆り立てる力があるかのようです。内側からも、外側からも。

ここで、聞くのがつらい言葉が出てきます。それはすべての人に当てはまります。私にもです。

聖書はこう言います。すべての人は罪を犯して、神の栄光に届かない。²つまり、だれ一人として、神が初めにその人を造られたとおりの者ではなく、またそうなることもない、ということです。

2. ローマ人への手紙3章23節

私はだれも責めていません。だれも訴えていません。最後には、だれもが自分自身と向き合うことになります。自分自身から逃げ続けることも、いつかは終わります。それなら立ち止まって、正直になったほうがよいのです。縛られていること、むなしさ、無意味さ、罪責、孤独、心が碎けていること、暴力、過ち。そういうものはありませんか。それらは熱のようなものです。けれども熱は病気そのものではありません。熱は、病気があること、どこかがおかしいことを示しているのです。

その奥に病気が潜んでいます。それは騒がしくはありません。静かに働きます。そして、それから逃れられる段階はどこにもありません。罪は、ほかの人や私の外にだけあるのではないからです。罪は私の中に座っています。私の人生の中に、私の歩んできた歴史の中に、私という存在の中に。

ある哲学者は、私たちの良心を法廷と呼びました。そこには三つの声があります。検察官と、弁護人と、裁判官です。三人とも私たちの中で語ります。検察官は、私たちがしたことを数え上げます。弁護人は言い訳を探します。そして裁判官は、私たちが逃れることのできない判決を下します。この法廷を、だれかに説明してもらう必要はありません。私たちはそれをいつも持ち歩いているのです。

ですから、ただの言葉では足りません。だれかが私に「水に流そう」と言ってくれるなら、それは親切です。けれども、それで私が別の人間になるわけではありません。起こったことが起こらなかったことになるわけでもありません。「大したことはないよ」と言って子どもを癒やす医師はいません。

ですから、私たちには二つのことが必要です。赦されること。そして、私たちの中に座っているものが出て行き、終わりを迎えること。どちらか一方だけでは助けになりません。

3 神は本当はどんな方か

私たちは、神なしにこの状態から抜け出すことはできません。私たちの存在は、神なしには考えられません。私たちがそれを信じていても、信じていなくても。

まず、一つの誤解について。

ほとんどだれもが、頭の中に神のイメージを持っています。信じていない人もそうです。それはしばしば、厳しい監視人のイメージです。すべてを見ていて、何一つ忘れない方。子どものころにこう教わった人もいます。「神さまは全部見ているよ。」それは慰めには聞こえませんでした。見張られているように聞こえました。

これをイエスの十字架に当てはめると、こうなります。神は罰を望んでいる。イエスが間に身を投げ出したので、罰は私たちではなくイエスに当たった。御子が怒っている父をなだめたのだ。

多くの人がこう聞いてきました。教会の中でもです。そのために教会を去った人もいます。まず血を見なければ優しくならない神を、だれが信頼したいと思うでしょうか。

その中には、正しいこともあります。神は私たちのすることを見ておられます。そして、何でも簡単に拭い去ってしまわれるわけではありません。けれども、残りは正しくありません。このイメージから出発すると、最後にはすべてを誤解してしまいます。このイメージはゆがんだ絵です。少なくとも、ひどく切り詰められた絵です。

もし神がまったく違う方だとしたら、どうでしょうか。聖書の中で、だれが最初の一步を踏み出しているかを見てみましょう。それは決して人間ではありません。いつも神です。神は、身を隠したアダムを園で捜されます。アブラハムと呼ばれます。ご自分の民に一つの戒めを与えるよりも前に、その民

をエジプトの奴隷の身分から連れ出されます。そして最後に、ご自分の御子を遣わされます。

聖書の最もよく知られた言葉の一つは、こう言っています。神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。³

御子が父から愛を無理やり引き出したのではありません。父が御子を与えたのです。愛していたからです。第1章の医師が、助けたいと思ったからやって来たのと同じです。説得されたからではありません。

では、私たちがほかの人に、そしてそれによって神に対してしてしまったことを、神はどのように扱われるのでしょうか。もう一度、私たちのことから始めましょう。だれかがあなたを傷つけたと想像してください。深く。あなたには二つの道があります。仕返しをすることもできます。あるいは、赦すこともできます。

赦すとは、どういうことでしょうか。傷がなくなるということではありません。損害を相手に返すかわりに、あなた自身がそれを負う、ということです。赦す人は支払います。いつでもです。それが赦しの代価です。そして、それを支払うのは罪を犯した人ではなく、赦す人なのです。

これが人と人との間での経験です。では、神の場合はどうでしょうか。旧約聖書、聖書の最初の部分で、神はご自分の民にこう言われます。

あなたは自分の罪で、わたしに苦勞をかけた。わたし、このわたしが、わたし自身のために、あなたの背きを拭い去る。⁴

この二つが並んでいます。罪は神に苦勞をかけます。神はそれを負われます。そして神はそれを拭い去られます。私たちがそれに値したからではありません。神がそういう方だからです。過ちを待ち構えている裁判官ではありません。私たちが神にその重荷を負わせてしまったことに気づくずっと前から、すでにその重荷を負っておられる方です。

3. ヨハネの福音書3章16節

4. イザヤ書43章24節と25節

けれども、これは半分にすぎません。神は、何もなかったかのようにふるまわれるわけではありません。何でも見過ごす神は、良い神ではないでしょう。それは無関心な神です。子どもが不当な目にあったら、だれかがそれを真剣に受け止めることを私たちは期待します。神はそれを真剣に受け止められます。すべてを。私がした不正も、私がされた不正と同じように真剣に。

問題は、神が罪を負い、耐え忍ぶときに、正しく、公平で、筋が通っているかどうかです。神は、過去も現在も未来も、すべてを正しい状態に戻されるのでしょうか。それは、すべての人、一人ひとりに関わることになるでしょう。私たちの失敗によって、私たちの罪によって生じた損害は、いつか償われることがあるのでしょうか。想像もつかないことです。おそらく、想像もつかない奇跡によってしか起こりえないでしょう。⁵

これらすべてが、私たちを十字架へと導きます。ただ厳しいだけの神なら、十字架は要らないでしょう。ただ罰し、報いればよいのです。ただ優しいだけの神にも、十字架は要らないでしょう。見て見ぬふりをすればよいのです。それも同じように悲劇的です。けれども神はその両方です。神は罪を真剣に受け止められます。そして、罪を犯した人を丸ごと愛しておられます。このような神は、その両方が真実であり続ける道を進まれます。そのとき神は、あちらとこちらで引き裂かれているわけではありません。神は愛です。そして神のなさることは愛です。それは、正しく聖なる愛なのです。

十字架こそ、その道です。そしてそれは神の道です。私たちの道ではありません。

5. ローマ人への手紙3章25節と26節

4 なぜ血なのか

十字架は血なまぐさい出来事でした。そして、私たちは血の話を避けて通ることはできません。たとえそれが奇妙に聞こえても。少なくとも、私たちの住むこのあたりでは。

日常生活で血に出会うことはあまりありません。けがをしたとき。医者で採血されるとき。あるいは献血のとき。献血の場で、私たちはふだん忘れがちなことを学びます。血は命を救うことができる、ということです。一人の人の血が、ほかの人を生かすのです。

初めて礼拝に出席した人は、イエスの血についての歌を耳にするかもしれません。そして不思議に思います。あるいは気味悪く感じます。なぜキリスト教は血なしではやっていけないのでしょうか。なぜ赦しの言葉一つでは足りないのでしょうか。

もう一度、私たちのことから始めましょう。小さな男の子が、お母さんの白いテーブルクロスにフェルトペンで絵を描きます。お母さんが入って来て、それを見ます。そして、その子を赦します。すぐに、責めることもなく。けれども、テーブルクロスは色とりどりのままです。赦しはそれをきれいにはしません。だれかが洗わなければなりません。そして、洗うのはその男の子ではありません。

これが、赦しときよめの違いです。赦しはこう言います。「私はそれをあなたの責任として数えない。」きよめはこう言います。「それはもうなくなりました。」私たちには両方が必要です。第2章で見たように、罪は病気のように私たちの中に座っています。ですから私たちに必要なのは、「水に流そう」と言ってくれる人だけではありません。癒やしてくれる方が必要なのです。

では、神の場合はどうでしょうか。神は、イエスよりずっと前に、ご自分の民イスラエルにこのことを教えられました。私たちには異質な言葉です。当時はだれもがそれを理解していました。それは、いけにえの言葉です。

罪を負ったイスラエル人は、一頭の動物を聖所に連れて行きました。神が住んでおられる場所です。彼はその動物の頭に手を置きました。それは、「この動物は今、私の代わりに立つ」という意味でした。それから動物は屠られました。祭司はその血を取り、祭壇に持って行きました。血こそが肝心なことでした。殺すことではありません。血です。

なぜでしょうか。聖書では、血はいのちを表しているからです。モーセの律法の中で、神はこう言われます。

いのちは血の中にある。わたしはそれを、あなたがたを覆うために、祭壇の上でああなたがたに与えた。⁶

この一文には多くのことが含まれています。神が血を与えておられます。債権者がお金を取り立てるように、それを要求しておられるのではありません。医師が薬を与えるように、それを与えておられるのです。そして、血がすることは「覆う」と言われています。血は罪の上に覆いかぶさります。そして同時に、それを取り去るのです。

この異質な言葉は、何を語っているのでしょうか。三つのことです。

罪は重大です。

それは一つのいのちを代価とします。

そして、そのいのちを与えるのは神です。

けれども、動物たちはただの絵にすぎませんでした。羊は、自分が何のために死ぬのかを知りません。何も理解しないので、何かを自分の身に引き受けることもできません。聖書自身、動物の血は罪を取り除くことができない、と言っています。⁷それは一種の授業でした。神はそれによって、ご自分がいつか本当に行うことを予告しておられたのです。

そして神は、それを実行されました。動物によってではありません。自分が何をしているのかを知っている一人の人間によってです。それを自ら望んだ人によってです。神ご自身の御子であった方によってです。ここで神は、だ

6. レビ記17章11節

7. ヘブル人への手紙10章4節

れか他人の血を取られたのではありません。ご自分自身の血を与えられたのです。

だから、血なのです。神が血を見たいからではありません。罪がいのちを代価とするからです。そして、それがご自分自身のいのちであるべきだと、神が決められたからです。父と御子は、このわざにおいて完全に一つです。

5 イエスご自身が語ったこと

では、イエスご自身はどうだったのでしょうか。自分に何が迫っているのかを、知っていたのでしょうか。

だれかが若くして亡くなると、残された人たちはよくこう問います。あの人は予感していたのだろうか。今になってやっとわかるようなことを、何か言っていなかっただろうか。ときには手紙が見つかります。あるいは、そのときは聞き流してしまった一言を思い出します。

イエスの場合には、別の疑いが浮かびやすいでしょう。その死の意味は、あとからつけ加えられたのではないか。一人の説教者が行き過ぎた。権力者たちが彼を片づけた。そして友人たちが、その無意味な死に、あとから意味を探した。そういうことは起こります。人は悲しみの中で、そうするものです。

けれども、記録は別のことを語っています。イエスは、死が来る前に、自分の死について語っていました。何度もです。そして、まさに人を解放するという意味を、イエスご自身がその死に与えていたのです。

イエスは友人たちに三度、自分はエルサレムに行き、そこで死ななければならない、と言いました。「ならない」のです。彼らはそれを聞きたくありませんでした。その一人ペテロは、激しく反対しました。それでもイエスは、言ったことを曲げませんでした。

あるとき、イエスは自分を医者と呼びました。人々は、イエスが嫌われ者の取税人や、ほかの評判の悪い人たちと一緒に食事をしていることを非難しました。イエスはこう答えました。

医者が必要とするのは丈夫な人ではなく、病人です。⁸

イエスは、自分がだれのところに來たのかを知っていました。そして、何のために來たのかも語りました。

8. マルコの福音書2章17節

人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。⁹

「人の子」とは、イエスが自分自身を呼んだ呼び名です。「贖いの代価」とは、捕らわれている人を買戻すためのお金のことです。捕らわれの身から、奴隷の身分から、借金を背負った人生から。イエスはこう言っているのです。わたしのいのちがその代価だ。そして、自由になるのはあなたがただ。

最後の晩、イエスは友人たちと過越の食事をしました。この祭りで、イスラエルは今日に至るまで、エジプトからの解放を思い起こしています。イエスはパンを取り、裂いて言いました。これはあなたがたのための、わたしのからだです。そしてぶどう酒の杯を取って言いました。これは、罪の赦しのために多くの人のために流される、わたしの血です。¹⁰

彼らにはわかりませんでした。わかったのは、もっとあとのことです。けれどもイエスは、それが起こる前に語っていたのです。自分が死ぬことを知っていました。だれのためにかを知っていました。そして、何のためにかを知っていました。

それから、オリーブ山のふもと、ゲツセマネの園での夜が来ました。そこで私たちは、それがイエスにとってどれほどの犠牲であったかを見ます。イエスは三人の友人を連れて行きました。そして、悲しみのあまり死ぬほどだ、と彼らに言いました。それから地面にひれ伏して、こう祈りました。

父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたのお望みになることが行われますように。¹¹

「杯」は古い比喻です。イスラエルの預言者たちのもとでは、杯とは、神が人に飲ませるものです。その人の分け前。その人の運命です。それが祝福であることもあります。人に割り当てられうる最も重いものであることもあります。

9. マルコの福音書10章45節

10. ルカの福音書22章19節、マタイの福音書26章28節

11. マルコの福音書14章34～36節

ます。イエスは、自分の杯に何が入っているのかを見ました。それが自分から過ぎ去るようにと願いました。そして、それを飲み干したのです。

つまりイエスは、つまずいて死に転がり込んだものではありません。何が来るのかを見ていました。それを免れさせてくださいと願いました。それでも進んで行ったのです。このことには第7章でまた戻ってきます。

十字架の上で、死の直前に、イエスはもう一言語りました。ギリシア語では、ただ一つの単語です。ドイツ語では三つの単語が要ります（Es ist vollbracht）。日本語では「完了した」と訳されます。¹² これは「もう終わりだ」という意味ではありません。「成し遂げられた」という意味です。任務は果たされたのです。

12. ヨハネの福音書19章30節

6 三つの難しい言葉

ここから難しくなります。

ゆっくり読まなければならない三つの文です。

二度読まなければならない文があることを、あなたも知っているでしょう。医師からの診断書。役所からの手紙。読んで、いったん置いて、もう一度読みます。多くのことがそれにかかっているからです。

イエスの死についても、そのような文があります。最初のキリスト者たちは、イエスの死を少しの文にまとめました。そのうちの三つは、特に重いものです。多くのことを担っているので重いのです。そして、誤解されやすいので難しいのです。

第一の文：キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれた。¹³

これは、私たちが持っている十字架についての最も古い文です。パウロはそれを紀元55年ごろ、コリントのキリスト者たちに書き送っています。そして、自分もこの文を、自分より前にキリスト者となった人たちから受け継いだのだ、とつけ加えています。つまりこの文は、十字架のあとの最初の数年にさかのぼるのです。何世代もあとにだれかが考え出したものではありません。

私たちの罪のために。「彼の敵のせいで」ではありません。「私たちの模範として」でもありません。**私たちの罪のために、**です。イエスの死は、第2章で見たことと関係しています。私たちの中に座っている病気と関係しています。私たちがもう取り返しのつかないことと関係しているのです。

聖書に書いてあるとおりに。それはつまり、イスラエルの聖書に、前もってそう書かれていたということです。最初のキリスト者たちは、十字架を新しく考え出したものではありません。彼らは聖書の中に十字架を見いだしたので

13. コリント人への手紙第一15章3節

す。最もはっきりしているのは、すでに何百年も前からあった一つの歌の中です。その歌は、さげすまれ、苦しみ、死んでいく神のしもべについて語っています。そしてこう言います。

彼は私たちの病を負った。私たちの背きのために彼は刺し通された。主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。¹⁴

ここにある言葉は、本当に「病」という意味です。それは「罪の病」です。預言者は、ほかの人たちを病ませているものを、自分の中に受け入れる一人の人を見えています。子どものベッドのそばにいる、あの医師のようにです。

イスラエルの聖書にある解放の物語は、十字架を指し示しています。そこで一つの民族に起こったことが、ここではすべての人のために起こるのです。

第二の文：神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方であって神の義となるためです。¹⁵

これが三つの中で最も難しい文です。少しずつ区切って読まなければなりません。

罪を知らない方：イエスには自分自身の罪がありませんでした。不正と手を組んだことも一度もありませんでした。**罪とされた：**神はイエスを、罪がいるべき場所に置かれました。イエスを、私たちのありのままの姿と一つにされたのです。「神はイエスを罪人にした」のではありません。そうではなく、「神は私たちの問題を、丸ごとイエスに引き渡された」のです。そして、その目的は：**私たちが神の義となるため。**この方であって、です。

ここで「義」とは、「欠点がない」という意味ではありません。「神との関係が清算されて、きれいになっている」ということです。もう一度、神のもとに属する者となることです。

これは交換です。イエスは私たちのものを受け取ります。私たちはイエスのものを受け取ります。けれども、それは市場での交換のように、見知らぬ二人が何かをやり取りするようなものではありません。それは、イエスの中で

14. イザヤ書53章4～6節

15. コリント人への手紙第二5章21節

の交換です。私たちは、その中に取り込まれるのです。イエスの十字架の死の中へ。そして、イエスの復活のいのちの中へ。

パウロはあるとき、一人の友人に短い手紙を書きました。その友人のところから、一人の奴隷が逃げ出していました。名前はオネシモです。もしかすると、何かを持ち出していたのかもしれませんが。パウロは彼と知り合い、彼を送り返します。そしてこう書きます。もし彼があなたに何か負債があるなら、それは私の勘定につけておいてください。私が支払います。¹⁶ ここでは、だれも罰のことなど考えていません。一人の人がほかの人のために立つのです。聖書はイエスについても、このように語っています。

第三の文：キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。

17

この文は、第1章ですでに知っています。この文は場所を示しています。そのからだにおいて。木の上で、十字架の上で。頭の中でのことではありません。天のどこかでのことでもありません。ある特定の日に、ある特定の木の柱の上で、血を流すことのできるからだにおいて起こったのです。

そしてこの文は、そのわざを示しています。「負った」のです。これには、いけにえの言葉から、もう一つの絵が関係しています。年に一度、大いなる贖罪の日に、祭司は生きている雄やぎの頭に両手を置きました。そして、民のすべての罪をそのやぎの上で告白しました。それから、やぎは荒野へ追いやられました。やぎは罪を運び去りました。罪が二度と戻って来ない場所へ。¹⁸

まさにこの言葉が、第三の文の中にもあります。「負った」。運び去ったのです。イエスは、罪を外へ運び出すあのやぎのようです。そして同時に、その血がきよめるいけにえでもあります。その両方が、一人の人格の中にあるのです。

16. ビレモンへの手紙18節と19節

17. ペテロの手紙第一2章24節

18. レビ記16章21節と22節

この文はさらに続きます。それは、私たちが罪に対して死に、義のために生きるためです。そこには「私たちが気分よくなるため」とは書いてありません。「私たちが違った生き方をするため」と書いてあるのです。イエスの死は、私たちのために起こったことであるだけではありません。それによって、私たちとともに、私たちの中でも、何かが起こるはずなのです。

そして、すでに知っているあの文が来ます。その傷によって、あなたがたは癒やされた。イエスの死は、私たちのいのちなのです。

7 イエスの死はどのように私たちを救うのか

ここで一つの答えが来ます。少なくとも、答えようとする試みです。

大切な人を失った人は、こう問います。なぜ？ なぜあの人が？ なぜこんなふうに？ たいいてい答えはありません。死は無意味なままです。

イエスについては、私たちは別の問い方をします。「なぜ彼は死んだのか」だけではありません。「彼の死の中で何が起こったのか」と問うのです。これは第1章で挙げた三つ目の問いです。五つの段階で、この問いに近づいてみます。

第一に：イエスはそれを自ら引き受けました。

イエスは事故に巻き込まれたものではありません。自分から入って行ったのです。エルサレムで何が待っているのかを知っていました。そして、そこへ行きました。死の前の夜、イエスは、それが自分から過ぎ去るようにと祈りました。そしてこう言いました。わたしの望むことではなく、あなたのお望みになることが行われますように。¹⁹

そのあとに起こったことは、人間がしたことです。友人による裏切り。初めから決まっていた判決。むち打ち、あざけり、処刑。天からの稲妻ではありません。人間の手です。それでも聖書は言います。まさにそれが神の道だったのだ、と。神はご自分の御子を引き渡されたのです。²⁰ どちらも真実です。人間がそれをしました。神はそれが起こるのを許されました。神がそう望まれたからです。第3章で語った、あの想像もつかない奇跡が、そのようにして起こるためでした。

イエスがそこで苦しんだことは、神なしの世界がその成り行きのままに進むときに起こることです。蒔かれた種が芽を出します。偽り、不正、暴力、死。それが罪と咎の刈り入れです。イエスはそれを、自分自身のからだで刈

19. マルコの福音書14章36節

20. ローマ人への手紙8章32節、使徒の働き2章23節

り取りました。それは、イエスの刈り入れではありませんでした。私たちの刈り入れだったのです。

第二に：それは彼のものではなかったので、彼はそれを負うことができました。

ここで、第1章の医師のたとえが役に立ちます。なぜ医師は、子どもから病気を取り去ることができたのでしょうか。医師自身はその病気にかかっていたからです。医師は健康なまま、外からやって来ました。自分が窒息しかけている医師は、子どもに息をさせてあげることはできません。

ここでも同じです。イエスには自分自身の罪がありませんでした。撤回しなければならぬ言葉は一つもありませんでした。ボタンと閉めたドアもありませんでした。だからこそ、私たちの罪を負うことができたのです。正しい方が、正しくない者たちのために。²¹ イエスは負います。私たちの罪を引き受けます。完全に罪人の側に立つのです。それが十字架の上で起こります。その数時間に、それはイエスに何をもたらしたのでしょうか。

第三に：イエスはそれを自分の死の中へ持って行きました。

なぜ、それは死でなければならなかったのでしょうか。

第2章を思い出してください。罪は、ほかの人や私の外にだけあるものではありません。罪は私の中に座っています。私の人生の中にです。罪という、この命にかかわる病気は、一つの人生の中に座っています。そして、その人生が終わるときに、初めて終わりを迎えるのです。だから、請求書のように簡単に帳消しにすることはできません。請求書なら破り捨てることができます。人生はそうはいきません。

イエスは私たちの罪を、ご自分の人生の中に受け入れました。医師が子どもの病気を受け入れたようにです。そして、その人生を死に渡しました。罪と私たちの病気は、それがいるべき場所へ、一緒に連れて行かれました。あのやぎが罪を荒野へ、死の地へと運んだようにです。罪はそこにとどまったのです。

21. ペテロの手紙第一3章18節

聖書は、それをこの厳しい一文で言い表しています。

神は、御子の肉において罪を罪として処罰（し、さばか）れたのです。²²

御子を処罰したのではありません。罪を処罰したのです。罪は、イエスがそれを運んで行った場所で、その判決を受けました。これが、第3章の問いへの答えです。神は見ても見ぬふりをなさいません。神は罪をさばかれます。そして罪人を救われます。こうして、イエスが私たちのために死んだことが、いのちへの扉となるのです。

では、血は？ 聖書では、血は差し出されるいのちを表しています。残酷さを表しているのではありません。血はこう語っています。わたしはあなたがたのために、わたしのいのちを捨てる。

罪の報酬、罪の結果は死です。いのちの創始者が、私たちの代わりに死なれます。私たちを、いつまでも続く永遠の死から救うためです。

第四に：死はイエスを捕らえておくことができませんでした。

ここで、医師のたとえは終わります。医師はその病気で死にました。そして、それで終わりでした。イエスの場合は、それで終わりではありませんでした。イエスご自身は、完全に善い方であり、正しい方でした。ほかの人の罪が終わりを迎える死には、イエスをとどめておく権利も理由もありません。三日後、墓は空でした。それがなければ、ほかのすべては一つの美しい模範にすぎなかったでしょう。それがあからこそ、それは救いなのです。これについては次の章で語ります。

第五に：イエスの死は、私たちの死とみなされます。

いよいよ、それを私自身のことにする一歩です。聖書は「イエスは私たちのために死んだ」と言うだけではありません。「私たちはイエスとともに死んだ」と言うのです。²³ これは、ただの敬虔な言い回しではありません。こういうことです。イエスの死において終わりを迎えたのは、私の病んだ、罪深い本性だった。かつての私という人間は、そこで十字架の上で死に、イエス

22. ローマ人への手紙8章3節

23. ローマ人への手紙6章4節、コリント人への手紙第二5章14節

とともに墓に葬られた。そして、イエスの墓から出て来たものは、私がこれからなるべきものの始まりなのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生まれました。²⁴

だから、この死には、飛ばしてはならない小さな言葉が一つあります。「ともに」です。「私たちのために」だけではありません。「イエスとともに」なのです。イエスにしっかりとつながる人は、一緒に連れて行かれます。罪と咎がとどまるイエスの死の中へ。そして、罪がもはやないイエスのいのちの中へと連れ出されるのです。

二千年前の一つの出来事の中で、このつながりがどのようにして起こりうるのか。それは私には言えません。ここでも言えるのは、これが神の道であり、神の解決だということです。

それが意味すること。

あなたがもう取り返しのつかないことを、思い浮かべてみてください。あなたに嫌な思いをさせるために、それを思い出させるものではありません。それは起こらなかったことにはなりません。だれもそうは言いません。けれども、それは運び去られたのです。それを負うことのできる方によって。二度と戻って来ない場所へ。

では、あなたは？

あなたはもう、それが中に座っている人ではありません。あなたはイエスとともに、死を通り抜けたのです。これは感情ではありません。神が確定された事実です。あなたは、この神の真理の上に立ってよいのです。

それでも、私には説明できないことが残るでしょうか。はい、残ります。一つのいのちが、どのようにしてほかのいのちを、死を通り抜けて一緒に連れて行くことができるのか。それは神秘のままです。それがイエスにとって、心の最も深いところで何を意味したのかも、同じです。けれどもそれは、日付と、場所と、空の墓を持った神秘なのです。

24. コリント人への手紙第二5章17節

この場所で私に言えるのは、ただこれだけです。ありがとう、イエスさま。
ありがとうございます！

8 なぜイースターが欠かせないのか

金曜日に、イエスは死にました。

日曜日に、墓は空でした。

お墓の前に立ったことのある人は、あの感覚を知っています。ここで何かが終わった。決定的に。花を供えることも、ろうそくをともしすることもできます。けれども、最後の言葉を語るのは死です。少なくとも、そう見えます。

想像してみてください。イエスの物語が金曜日で終わっていたとしたら。一人の善い人が処刑された。友人たちは、次は自分たちの番だと恐れて身を隠した。墓は重い石でふさがれ、見張られていた。

それなら、私たちは心を動かされる一つの模範を持つことになったでしょう。自分の信念のために死んだ人。十字架の上でさえ、自分を処刑する者たちのために祈った人。私たちは彼を尊敬することはできたでしょう。彼をまねしようとすることもできたでしょう。けれども、救われる人はだれもいなかったでしょう。彼は第1章のあの医師と同じだったことになります。病気を自分の中に引き受け、そしてその病気に殺されたのです。

パウロは、はっきりとこう言います。

もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいるのです。²⁵

今もなお自分の罪の中に。そうだとしたら、墓は罪がとどまった場所ではなかったことになります。イエスもまたとどまった場所にすぎなかったことになります。そうなれば、この本に書いてあることは、すべてむなしくなってしまいます。

最初のキリスト者たちは、とんでもないことを主張しています。イエスは死んだままではなかった。三日目に墓は空だった。女性たちが、朝早くにそれ

25. コリント人への手紙第一15章17節

を見つけた。そしてイエスは友人たちに出会った。幽霊としてではありません。彼らと一緒に食事をし、その傷に触れることのできる方として、です。

もし、それが本当だとしたら、どうでしょうか。私たちの問いにとって、少なくとも三つのことを意味します。

第一に：神が「はい」と言われたのです。金曜日に起こったことに「はい」と。もし神がイエスをよみがえらせたのなら、イエスの死は、神があとから修理しなければならなかった不幸な事故ではありませんでした。その全体が道だったのです。そして神は、その道を確証されたのです。古い一文が、その両方をひと息に語っています。イエスは私たちの背きのゆえに引き渡され、私たちが神の前に義と認められるためによみがえらされた。²⁶ 死は罪を取り去ります。復活は「それは永遠に有効だ」と告げるのです。

第二に：罪は墓の中にとどまりました。イエスはとどまりませんでした。それは、罪がもはや存在しないというしるしです。もし何かがまだ片づいていなかったなら、死はイエスを手放さずにいることができたでしょう。

少し説明しておきます。「罪は墓の中にとどまった」というのは、一つのたとえです。罪は片づけられ、取り除かれ、もうそこにはない、という意味です。

第三に：イエスは生きておられます。私たちのために死なれた方は、過去の人ではありません。今ここにおられます。今日も。いつまでも。イエスは、人間の、そして朽ちることのない復活のからだをもって、神のもとへ行かれました。そこから再び来られます。

ところで、ジフテリアの話には続きがあります。19世紀の終わりに、治療薬が見つかりました。それは馬の血から作られました。人々は馬に、この病気の毒を与えました。初めは少し、それから多く。馬はそれに打ち勝ちました。そして馬の血の中には、子どもたちを救うものができていたのです。こうして何千人もの子どもたちが生き延びました。

26. ローマ人への手紙4章25節

どんなたとえも完全ではありません。このたとえもそうです。けれども、何かを示してくれます。病気を経験し、それに打ち勝った者のいのちは、ほかの人を癒やすことができるのです。イエスは世界の病気を自分の中に受け入れ、死に打ち勝ちました。イエスのいのちは、今、私たちのためにあります。聖書はこう言います。

私たちは、御子のいのちによって救われるのです。²⁷

悪はまだあります。病気もあります。そして死もあります。けれども、治療薬は見つかりました。それらの終わりは、もう決まっているのです。

27. ローマ人への手紙5章10節

9 良い知らせ

では、私は？

私にとって、それが何になるのでしょうか。

あなたはこの本を、ここまで読んでくださいました。もしかすると好奇心から。もしかすると疑いながら。もしかするとその両方で。これが、第1章で挙げた最後の問いです。それはどのようにして私に届くのか。一人の男が二千年前に死んで、よみがえった。それが私と何の関係があるのでしょうか。

ただ眺めているだけなら、何の関係もありません。けれども、その方に自分をゆだねたとたん、すべてが関係してきます。

重い病気にかかっている、同時に法廷で訴えられている一人の男を想像してください。彼には二つのものが欠けています。無罪判決と健康です。無罪にしてもらっても、病気のままかもしれません。病気を治してもらっても、訴えられたままかもしれません。彼には両方が必要なのです。

私たちの状態もそれと同じです。それを第2章で見ました。私たちには赦しが必要です。そして、私たちの中に座っている病気が終わることが必要です。十字架は、いえ、もっと正確に言えば、十字架につけられた方は、その両方を与えてくださいます。けれども、硬貨を入れれば出てくる自動販売機のようにではありません。ベッドのそばに来てくれる医師のように、それを与えてくださるのです。そこには出会いが必要です。

病人は何をしなければならないのでしょうか。第1章の子どもを思い出してください。その子にできることは何もありませんでした。ただじっとして、医師に任せることだけでした。医師が何をしているのかを理解する必要はありませんでした。ただ、医師にさせておけばよかったのです。

聖書には、それを表す言葉があります。「信じる」です。この言葉も使い古されています。多くの人はそこに、「証明できないことを本当だと思い込むこと」という意味を聞き取ります。けれども、意味されているのは別のこと

です。信じるとは、その方に頼ることです。助けることのできる方に自分をゆだねることです。あなたはすべてを理解する必要はありません。ただ、そして何よりもまず、このことだけです。赦し、癒やし、救うのは、この方だということ。あなたはこの方を、自分のそばに近づけなければなりません。この方に心を開き、迎え入れるのです。

では、そのとき何が起こるのでしょうか。ある一文がこう言っています。

こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、神との平和を持っています。²⁸

義と認められる。それが無罪判決です。そして平和。互いに相手がまた始めるかどうかをうかがっている停戦ではありません。平和です。問題は片づいたのです。私が片づけたからではありません。イエスが十字架の上で、それをご自分のからだに負われたからです。

これには三つのことが伴います。それは圧力ではありません。招きです。

向きを変えること。 それは「まず良い人になってから来なさい」という意味ではありません。方向を変えるという意味です。自分で自分を癒やそうとするのをやめることです。それはできない、と認めることです。向きを変えることは、昔ながらの言い方で「悔い改め」と呼ばれるものです。

洗礼を受けること。 洗礼は、からだ全体で行われるしるしです。水の中に沈められ、また上がって来ます。聖書は言います。私たちはキリストとともに葬られたのです。²⁹ かつての私という人間は、罪がとどまった場所に横たえられます。そして、そこから上がって来る人は、生きておられる方のものとなります。洗礼によって、人は新しい主に、王であるイエスに従うことを公に表明するのです。

仲間に加わること。 この道をひとりで行く人はいません。イエスに属する人は、ほかの多くの人たちとの交わりに属します。あなたにはほかの人たちが必要です。そして、ほかの人たちにもあなたが必要なのです。

28. ローマ人への手紙5章1節

29. ローマ人への手紙6章4節

そして、いよいよ終わりです。けれども、それは終わりではなく、始まりです。すべてはこの一文から始まりました。「彼は私たちのために死んだ。」今、あなたは、キリスト者がそれで何を言おうとしているのかを知っています。イエスは私たちの罪を、ご自分の中に受け入れられました。それはイエスのものではなかったからです。イエスはそれを、ご自分のからだに負って、死の中へ運んで行かれました。私たちと一緒にその中へ連れて行き、一緒にそこから連れ出してくださいました。そして、イエスは生きておられます。

あなたがもう取り返しのつかないことはあります。それは真実のままです。けれども、それを負ってくださった方がおられます。これが良い知らせです。聖書はそれを「福音」と呼びます。私は信じています。それは真実です。そして、それはあなたのための知らせなのです。



二千年前、一人の男が処刑されました。その友人たちは、のちにこう言います。「あれは私たちのためだった。」

それは、どういう意味でしょうか。人は、ほかの人のために死ぬことができるのでしょうか。そして、それは私と何の関係があるのでしょうか。

この本は、その問いを最後まで追いかけます。私たちの何がおかしいのか。神は本当はどんな方か。そして、なぜ一つの死が何かを変えることができるのか。それを語ります。

十字架は、ただのシンボル以上のものです。それは、永遠のいのちへの出口です。

本当に知りたいと思っている、すべての人のために。